

可汗及諸弟并親信略盡、立左賢王默棘連、是爲毗伽可汗

と見え、舊唐書突厥傳は殆んど之に従へり、此の中開元三年秋の事件は、新唐書突厥傳には

默啜討九姓、戰磧北、九姓潰、人畜皆死、思結等部來降、帝悉官之

と記され、阿布思なる首領の名に代ふるに思結なる部名を以てせり、舊唐書に阿布思と記せるものを新唐書に思結と記せる例は獨り此の場合のみならざること、既に第一章註釋(5)に於て見たるが如し、⁽²¹⁾されば通典及舊唐書と新唐書の記事とは一見相異れるが如きも、實は全く同一のものなること疑なし、更に冊府元龜^{卷九}七四 褒異篇には

〔開元三年〕十月己未授北蕃投降九姓思結都督磨散、爲左衛將軍

の記事あり、これ前記新唐書に「思結等部來降、帝悉官之」と記せるに符合するものにして、從つてこゝに九姓思結都督磨散といふものは、通典・舊唐書に九姓首領阿布思といふものに相當するものなること略ぼ疑無かるべし、ただ何故に一方に阿布思と記さるゝ名が他方に磨散と記さるゝかは疑問なれども、或は磨散は阿布思部長の別名なりしならんかとも思はる、⁽²²⁾要するに開元三年秋默啜が思結部を主とせる九姓と相戦ふや、九姓大に潰え、十月思結をはじめ九姓諸部の唐に來降するに至りしものなること明らかなりとす。

之につげる開元四年の事件は此等通典・舊唐書の突厥傳の外、新唐書の突厥傳にも亦殆んど同様に傳へられ、默啜の死が拔曳固の爲に不意に襲はれたるに歸因するものなること疑ふ可き餘地無きが如し、然るに獨り新唐書回鶻傳には

獨解支死、子伏帝匍立、明年助唐、攻殺默啜、於是別部移健頡利發、與同羅・霫等皆來、詔置其部於大武軍北